

田山君の墓前で

島崎藤村

早いもんで、もう花袋君の一周忌が来た。田山未亡人及び前田晁君、白石実三君などの骨折りで新しい墓碑が造られ、私が頼まれて墓名を書いたことでもあり、今日は墓参りを兼ねて多磨墓地を訪ねたが、丁度遺族の方や田山君の旧知、友人の人達が集まって墓のまわりに集って既に新しい墓石の前で経を読むのが始まっているところであつた。

墓のまわりは新たに植えられた樹もあり、その周囲は殆ど松林の間といつてもいいようなところで生前に武蔵野の自然を愛していた田山君の永眠の墓としては相応しく思われる。ある人が私に墓は亡くなった人の為にあるというよりも寧ろ生き残ったもののためにあると言ったことがあつたが亡くなった友達の墓の辺りに立つてみるとまたあの言葉が思い出される。

墓参りは心掛けていてもなかなか出来ないものだから、また何時ここを訪ねることが出来るであろうなんていうことを思った。多磨の墓地は地域も三十万坪もあると聞くようなところで墓地としての設計にも苦心の跡がみられ、丁度、若葉の頃とどこころには花などが咲き乱れている。故人を偲ぶには、いいところだと思つた。

あの墓畔を歩いていっているうちに色々なことを思い出したが、かつてバリのモン・パルナスの墓地にモウパッサンの墓を訪ねたことまで眼に浮かんで来た。

一体、田山君がああのような強健な体躯の持主で精力の盛んなことにかけても人一倍優れた人でしたが、ずっと長生きされる人かと思つていましたがそういう友人を先だてて自分のような者が生き残ることは不思議なような気がする。

先日もある田山君の書かれた随筆をあけてみると、如何にも田山君らしい正直さ、温か味がそこに残っていることを沁々と感じた。

私は田山君の残されたいろいろな随筆をもう一度読み直してみたいと思つている。そこには友達が居るような気がする。(十三日多磨墓地、墓前にて語る)

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所や補訂を加えた箇所もある。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より